

図書館報

令和7年2月25日発行

愛媛県立丹原高等学校

図 書 委 員 会

絵本の世界

教頭 木村 浩美



本棚に並んだ絵本の表紙を眺めていると、懐かしい気持ちになります。幼い頃に自分で読んだり、誰かに読んでもらったりしたことがある絵本、好んでよく見ていた絵本。どのようなストーリーであったのか、はつきりと覚えていた絵本とそうではない絵本がありますが、知っている気がするのです。絵本の魅力は何にある

のでしょうか。絵本には絵と文字があります。表紙をめくると物語が進んでいきます。文字を読むことで、または、読んでもらうことで絵の中から様々なことを読み取ることが出来ます。絵本には「言葉の力を育む」「想像力を豊かにする」「親子の絆を深める」「集中力が育つ」「道徳心を育む」「知的好奇心を刺激する」「心を癒す」「心を豊かにする」など、本当にたくさんあります。絵本の物語は、社会のルールとマナー、コミュニケーションの取り方などを教えてくれます。絵から想像力を働かせることも出来ます。絵本は赤

やんから大人まで、どの年齢の人たちでも楽しめるものであると思います。同じ絵本を読んでも、それぞれの年齢で捉え方が違ってくるし、その時の心の状態で感じ方は変わってきます。絵本はとてもおもしろいものです。

皆さんにとって、思い出の一冊の絵本はありますか。私の幼い頃のヒット作品は『はらぺこあおむし』でした。本が破れるくらいまで、何度も何度も開いてはめくり、めくっては文字を追ったり、声を出して読んだり、歌ったりしていました。カラフルな絵にも目を引かれていました。この絵本も子どもが読み、孫が見て楽しんでいきます。そして、私も一緒に読んで、懐かしみながら楽しんでいきます。まさに絵本は世代を超えて楽しむことができるのです。子どもの頃だけ

ではなく、大人になってから知った心にしみる絵本がありました。それは『おこだでませんように』と『ふくびき』です。子どもの繊細な心を表現した絵本で、子どもとの関わり方を考えさせられ、地域の人たちの温かさを表現したものです。

一度、手に取ってみて下さい。心が温まります。絵本は昔から現在までずっと続いているものもあるし、新しく作られたものもあります。時代が変わり、変化が大きい社会の中でも、変わらず受け継がれ、語り継がれているものが非常に多いのです。このような絵本を大切にし、大人になって心癒されるものとして、これからの時代も生き続けていくことでしょ。ふとした時に、そばにある、また図書館にある

絵本に目を向けて、絵本の世界に触れてみませんか。そこから何か新しい感覚が生まれるかもしれません。

私の読書体験

新任の先生方より原稿を寄せていただきました。

匂いにページをめくる

芸術科 越智 大介

国公立芸大を目指していた高校生の私は、絵画漬けの日々を送っていた。当時の国公立芸大は「競争率二十倍以上、現役合格0」という、現役生にとっては雲の上の恐怖の学府だった。恐怖を克服するには練習しかなかった。朝早くに美術室へ行きデッサン。昼休みは弁当もろくに食べずデッサン。放課後は二十一時までデッサン。木炭デ

ッサンは、指で擦って荒い木炭紙に木炭を擦りこむのでやりすぎると指から血がにじむ。思うように描けなくて目には涙がにじむ。画力が向上するならどんな小さな情報でも欲しかった。砂漠を彷徨う者が水を欲するように、美術関係の本をむさぼり読んだ。技法書、月刊誌、図録、予備校が発刊する情報誌……。その中の一冊は今でも手元に置いている。グザヴィエドラングレ著『油彩画の技術』だ。記述にならって、描画油の調合に勤しんだ。シッカチフフラマンとベネチアンテレピンバルサムに揮発油を混ぜて……と、こんなニッチでマニアックな本を紹介したところで誰が興味を持つてくれようか。美術教員が美術の本を紹介するのは当たり前すぎて面白くない。デッサンで形を捉える	訓練を続けていると、文字は単なる形でしかなくなる。いくら文章を読んでも文字は単なる形として認識されるだけで意味を伴って認識することができなくなる。 当時の私の脳は、視覚情報の処理ばかり強要されすぎて、視覚連合野だけでは処理できず言語野まで浸食していたのだろう。何度読んでも文字が上滑りをしていく。テストの文章を読むのも怖かった。読書を楽しむ余裕などなかった。この現象から解消されたのは大学に入ってからだった。ようやく読書を楽しむ余裕ができた私が愛読したのは吉本ばなな氏の本だ。彼女の書く文章は独特の「におい」がした。それが心地よかった。本には作家ごとの「におい」がある。私は「におい」で本を	選ぶ。アロマを楽しむように。 二冊の本との出会い 英語科 三島 朝子 ひたむきに、素直に、丁寧に生きようと自分と向き合わせてくれた二冊。その一冊目は、NHKで最近ドラマ化もされた高校の課題図書、『宙（そら）わたる教室』。著者の伊予原新さんは地球惑星科学研究所の経歴の持ち主。定時制高校の生徒たちが学会での発表をきっかけに、小惑星探査機「はやぶさ」の基礎実験に参加することにつながるという実話から着想を得たとのことだ。色々な事情を抱えた、年代も様々な生徒たちが自分の人生を懸命に生きようとする。その姿は、定時制高校に勤務した経験のある	私にとって、当時関わった生徒たちの姿とも重なり、私の特別な本となった。 「その気になりさえしたら、何だつてできる」、「学びの大切さ」を改めて実感でき、幅広い世代が楽しめる青春小説だ。 もう一冊は、『奇跡の人』で、ヘレンケラーとその先生であつたサリヴァン先生の二人の物語を明治期の青森県津軽地方に舞台を移して綴られている。この本ほど涙した小説は今までにない。著者の原田マハさんは芸術への造詣が深く、綿密な取材に基づき、史実も織り交ぜ、別世界に連れて行ってくれる。素晴らしい本との出会いは、豊かな人生への扉を開けてくれる。あなたにとつてのかけがえのない本との出会いを！	読書の思い出 事務課 森本 純也 「読書の思い出」という言葉を聞いて思い浮かんだのは大学時代に使っていた高速バスの車内だ。 大阪の大学に通っていた私は、愛媛に帰省する際、高速バスを利用していった。 片道五、六時間かかる道中、どうやって時間を過ごすか考え、選んだのが読書だった。よく読んでいたのは東野圭吾『新参者』シリーズなどの推理小説だが、山崎豊子『運命の人』や司馬遼太郎『坂の上の雲』などさまざまなジャンルの本を読んだ。 それまで私は、大量の字を読むのが億劫であまり読書をしてこなかったのだが、出発して二時間後と、三時間後にトイレ休憩があり、そこまで三分の
---	---	---	---	--

一は読もう、半分までは読もうと小さな目標を決め、読むことにしていた。

出発後すぐは目標達成のために読み進めていたのだが、気がつけば物語の世界に入り込んでおり、作品によっては込み上げてくる涙と戦いながら、周りの席の人にバレないように読んでいたこともあった。

今ではあまり高速バスを利用する機会は減ったが、退屈していたバスでの時間を有意義な時間に変えてくれた「旅のパートナー」、それが私にとつての「読書の思い出」である。



『夜のピクニック』

恩田陸 著

スクール・サポート・スタッフ

高橋 多美

私にとつて本といえば、漫画本を思い浮かべる。幼少期から漫画本ばかり読んでいた。大学生になり論文を書くことに苦戦をして、本を読み始めたくらいだ。それから、本を読んだ。こなかったことを後悔して、可能な限り、毎日就寝前に本を読むことにした。現在は、もっぱら子供と読む絵本になってしまったが。

そんな私が、丹原高校生におすすしたい一冊は、「夜のピクニック」(恩田陸著)。この物語の舞台は、高校生活最後の一大イベント「歩行祭」。全校生徒が夜通し八〇キロメートルを歩くというものだ。主人公を含む登場人物が、それ

ぞれ葛藤や秘密を抱えながら、ただ、ゴールの学校を目指して歩きながら語られる心の内が丁寧に描かれている。大人でも子供でもない、微妙で貴重な一瞬を感じさせてくれる一冊。

丹原高校にも色々な行事がある。きつと今だからこそ、共感できる部分も多いはずなので、是非読んでみてほしい。



愛顔感動ものがたり

エピソード部門

高校生以下の部 優秀賞

いびつな雑巾

三年 中川 桃佳

母が亡くなってから父と二人暮らしを始めることになった。突然のことで、感情の整理が追いつかなかった。一番身近で支えてくれていた母がいなくなつてから、感情をコントロールするのが難しくなった。苦しいのは私だけじゃないのに、思春期なのもあいまって、父へ対して強く当たってしまうようになった。そのたびに素直になれない自分が嫌で、申し訳ないという罪悪感があった。それでも、父はいつも通り気さくに話してくれていた。

「明日雑巾を持ってい

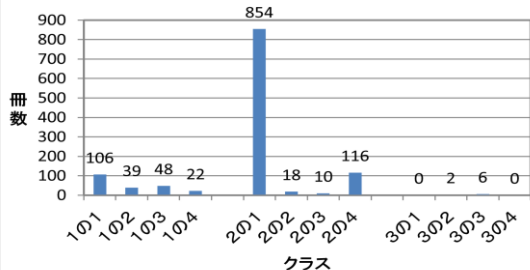
かないかんのやけど、どうしよ。」これは始業式前日の夜に私が父に言った言葉だ。次の日が始業式だと言うことを忘れていた私は、雑巾が二枚必要だということに気付いた。急いで父に話したが、夜遅くだったためお店はどこも閉まっている状態で、買いに行くこともできず、正直に先生に言うしかないと思い、諦めて次の日を迎えた。次の日の朝、父はいつも通り仕事で私より家を出る時間が早いため、もう家を出ていた。リビングへ行くと、そこには母が使っていたミシンと、父が縫ってくれたであろう縫い目がいびつな雑巾が置かれていた。おそらく私が寝ている間に、ミシンで作ってくれたのだろ



う。私はすぐくうれしかった。父は決して裁縫が得意ではない。得意ではない裁縫を、不器用ながらしてくれていたと思うと、申し訳なさと同時に感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

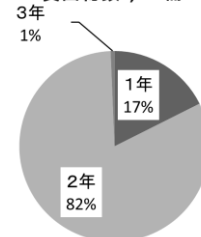
母が亡くなってからもう一年が過ぎ、何なく幸せに暮らせていた頃には戻れなくても、幸せに暮らせるように支えてくれていた父にはとても感謝している。私は、今はまだ愛情を注いでもらう側だけど、これからたくさん親孝行して、父を何不自由なく暮らせるように支えていける人間になりたいと思う。

クラス別貸出冊数



学年別貸出総数

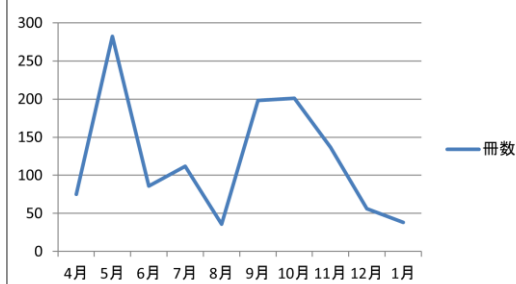
貸出総数1,221冊



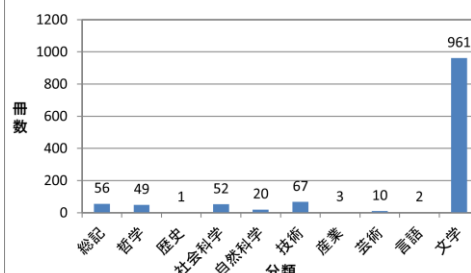
2025年1月末現在

図書館利用状況

月別貸出冊数



分類別貸出冊数



図書館報発刊に寄せて

今年度も、図書館報を発刊することができました。原稿の協力をしてくださった先生方、ご協力ありがとうございました。

作成にあたって、先生方の読書体験の原稿を読ませていただきました。とても印象深く、是非皆さんにも読んでほしいと思いました。

また、図書館利用状況等を具体的にグラフ化してみても、全体的に貸出冊数をもっと増やしていきたいと思いましたが、どのような工夫をするか、多くの生徒が図書館に訪れてくれるのか、図書委員一丸となって考えていきたいと思っています。

本校図書館では、『ちはやふる』『ブルーピリオド』などのコミックや、シリーズ物の文庫などが人気です。また、大学入試の小論文に出題された最新の話題の本は、図書

館の入り口近くに展示してあります。話題の人気作家の本や、哲学や心理学などの様々な分野の本が並んでいます。図書委員おすすめの本書も展示しているので、何を讀もうか迷った時には、図書委員に声を掛けてみてください。

二月になり、三年生の先輩方が来られなくなると、図書室の雰囲気もいっそう寂しくなりました。先輩方の姿から学んだことを生かし、これからも皆が過ごしやすい図書館を運営していきます。

図書館には、映画やドラマ、アニメの原作など、面白い本がたくさんあります。新聞や進路に関する本もあります。昼休みでも、放課後でも、空いている時間にぜひ、本を読み図書館に足を運んでみませんか？

(図書委員会)